

藤岡健児氏の戦後開拓



新得町本通北1丁目在住

明治31年12月22日生

東京空襲も激しくなって、日本の存亡にかかわる時局を迎えた昭和20年。貴族院議員でもあった松本市出身の今井五介の動議により、戦災者の疎開と、食糧の増産を果すため北海道未開地の開墾に国は目を向けた。時既におそく、その頃は敗戦の憂色濃く、敵機の空襲による交通網の分断・潜水艦の跳梁で、北海道へ渡ることさえ命がけの情勢となっていたのである。

東京市に於ける拓北帰農隊は、各区出身毎に隊を編成し、板橋隊のみが終戦前に新得へ到着。江戸川隊に属する私たちは10月に東京を離れた。空襲の激化の中では明日の命も分りかね、止むに止まれず帰農申込みをしていた市民も、戦争終結と共に取止めるものが多く、初心を変えず北海道へと目指したのは極く僅かというありさまに一変していた。

初冬の季節に新得の町へ降り立った私たち家族10人は先ず公民館に迎えられたが、そこでご馳走になったゆで馬鈴薯の味は、未だに忘れられぬ程美味しくて、旅の疲れも吹っ飛ぶ程に嬉しかった。

当初、政府役人の話では、現地では家も整っており、畑もまくばかりに用意をしてあるとのことであったが、そのようなことは夢物語同然で、かえって敗戦後におけるアメリカ占領軍の考えは、食糧はアメリカで調達すればよいとして、国内の開拓に甚だ消極的と聞いていたので、このようなことになっているのは当然だと覚悟はしていた。戦後疎開も、食糧増産もその意味がすっかり消え去ったのだから仕方のないことでもあった。

佐幌二十区の風防林地が入植地として割当てられ、翌春、落葉林の伐採跡地にまきつけを始めた。化学肥料など思いもよらぬ時代であったので、人糞を貰い、防風林地の腐葉土と混ぜ肥やしとしたが、大麦など優秀な出来栄えとなって部落の人を驚ろかしたものであった。当時、私たちの部落の実行組合長は加藤正夫さんという人で、現地への受入れやら開拓の世話など献身的につくして下さった。中でも感心させられたのは、引越し荷物と一緒に乗せて貰って6号坂を上っていく時、自身は後押しをしてついて来られる姿を見て、その人となり心から敬服したのであった。

数年間の豆作りを経験しているうちに、牛飼いに適している地帯だと思ふようになり広内より買入れた牛がつぎつぎと雌ばかりを産んでくれて幸運に恵まれたが、好事魔多しのたとえのように、畜産試験場の優秀雌牛を払下げて貰うまではよかったが、妊娠することなく終って大きな打撃を受けたことも思い出となった。

開拓者は入植当時、貧乏人の代名詞ででもあった。戦災保険金も預金封鎖で役に立たず世の中が沈静化するにつれて、残留することがふしぎだという有様に変っていった。

そのような状態の中で、私は牛飼いをすすめていったが、今度は用水でその望みが絶ち切られ、営農の継続を断念するまでになってしまった。水の解決がもう少し早ければ、農業には見限りをつけてはいなかったであろう。今もなお、嬰鑠たる藤岡さんは、耳はかなり遠くなったようではあるが、淡々とした口調で戦後開拓の生活を振り返り語って下さった。

明治31年 松本市浅間地区出身。当時わが国屈指の蠶糸業家の中で育つ。

大正9年 欧州大戦後の製糸業界大不況に家をとび出し、東京まつや百貨店に勤務。食堂の経営管理一切を任せられるまでになったが、王子区にあった自宅が空襲で罹災とともに、北海道集団帰農を決意す。

昭和20年 新得町上佐幌へ入植。

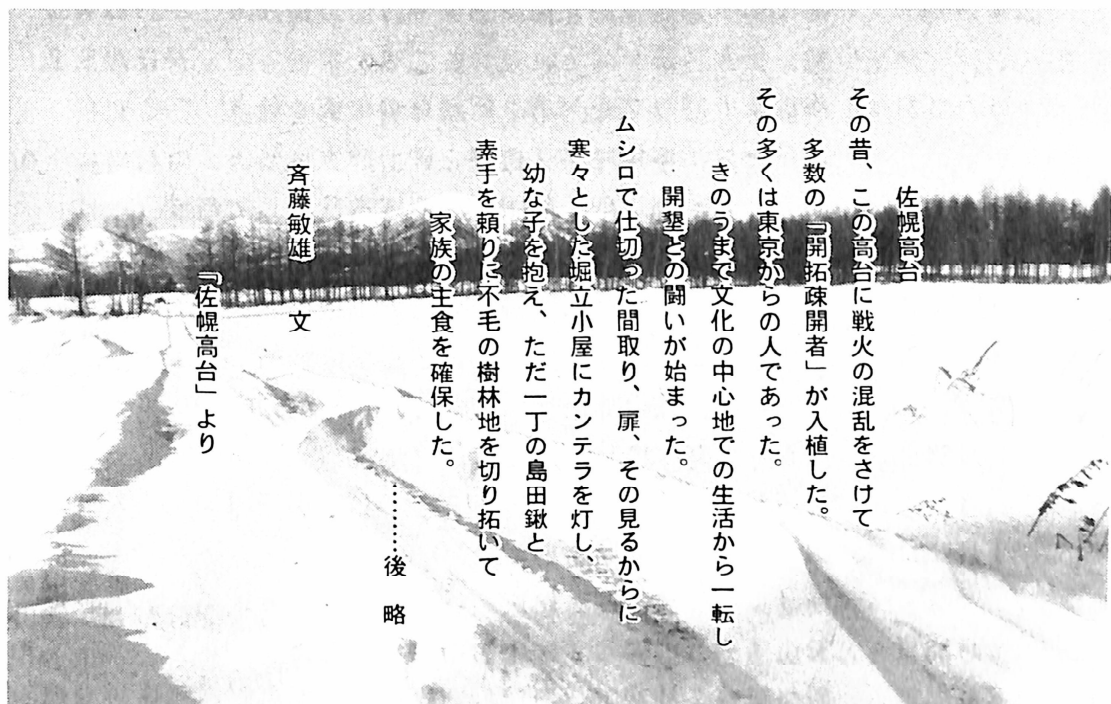
昭和23年 上佐幌での農業経営に対して先行きを心配し、単身新得市街地へとどまり、豆腐屋を開業。次いで納豆製造を始める。

事業安定の時期を見計い、子息二人に業務を委ねる。

～昭和50年 畜産試験場購買部・広牧寮管理などを経て、77才で勤めを終え、現在は専ら、囲碁、陶芸、老人クラブの会合にと悠々自適の生活を送っている。

昭和40年代 新得開拓農協組合長理事として、トムラウシ地区も含む町内開拓入植者の営農推進に力を注ぐ。

(文責 田近)



佐幌高台

その昔、この高台に戦火の混乱をさけて
多数の「開拓疎開者」が入植した。
その多くは東京からの人であった。

きのうまで文化の中心地での生活から一転し
開墾との闘いが始まった。

ムシロで仕切った間取り、扉、その見るからに
寒々とした堀立小屋にカンテラを灯し、
幼な子を抱え、ただ一丁の島田鍬と
素手を頼りに不毛の樹林地を切り拓いて
家族の主食を確保した。

……後略

斉藤敏雄 文

「佐幌高台」より

上佐幌20区 植田農場付近